

8. 喪乱帖



喪乱帖 王羲之(搨本)

1幅
紙本墨書(縦簾紙)
本紙26.2×58.9 総128.0×72.0
中国・唐時代(7世紀)

書聖王羲之(4世紀)の書状集、冒頭に「喪乱」の文字があるので呼ばれる。たてに簾目状の節目のある(縦簾紙)料紙に書かれた唐時代の搨模(透き写し)本。袖に「延暦勅定」の方印の左辺部が残る。明治13年妙法院献上。

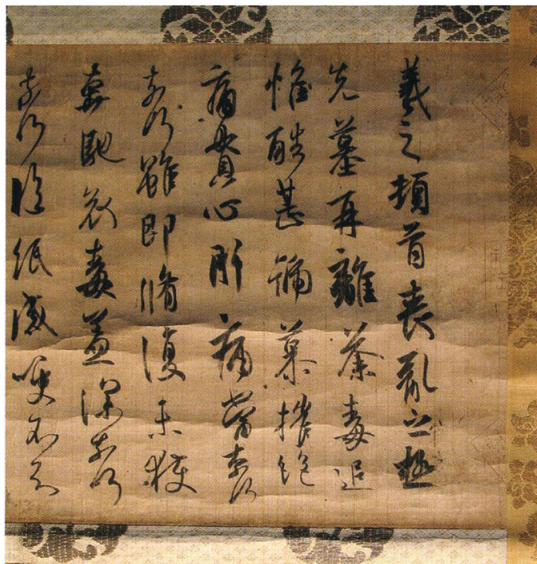
Soranzo (Transcription of Wang Yizhi's letters)
By Wang Yizhi (Copy)

Hanging scroll
ink on bamboo blind patterned paper
26.2×58.9
Tang Dynasty, China, 7th century

A traced copy of the collection of letters by master calligrapher Wang Yizhi (4th century), called *Soranzo* because of the first two characters, *soran*, written on lined paper. In 1880, it was presented to the Court from Myoho-in Temple.

義之頓首表亂之極
 先墓再離荼毒追
 惟酷甚痛兼摧絕
 痛費心肝痛當哀
 哀乃雖即脩復未獲
 毒既衣毒益深哀
 哀乃追紙復安為之
 何言義之頓首
 二謝面未比面遲誣良不
 靜 義之女 三子再入
 想那兒悲佳前 書者第
 心道遂安成 為如
 去過安
 得示多々之形 未付取
 吾之方し 明日出乃の
 不願觸霧坊也
 敬之 義之頓首

本紙



修理前の状態(斜光による)



左端二行の部分

材料と技法の解明、名品の謎に迫る

書聖と仰がれる王羲之の自筆は現存しないが、唐時代に皇帝の命によって集められた王羲之の書から精巧な模本が制作された。しかしそれらも中国本土内の度重なる戦乱で多くが失われた。日本には、奈良時代に優れた王羲之の模本が渡来していたことが、正倉院宝物中の『国家珍宝等帳』の記載より知られる。その記載によれば、王羲之の書法を示す巻物が20巻存在しており、それらは「搨羲之書」のように、搨模されたものであることを示す「搨」の文字が付されている。これらは正倉院宝物には現存しておらず、どのような経路で、どのような理由で日本にもたらされたのかも不明である。しかし、『雙倉北雑物帳』（『続々群書類従』第十六所収）によれば、桓武天皇の天応元年（781）8月12日にこの20巻は「進於内裏」と記され、そのうちの12巻は同月18日に正倉院に返納、残る8巻は延暦3年（784）3月29日に返納されている。本作品の右端に捺された「延暦勅定」の印はこの間に捺されたものかと考えられており、それによっても、本作品がかつて正倉院宝庫に収められていた巻物の一部であるという理由になっている。その後、大きく時を隔てた江戸時代、後西天皇の崩御後、弟である妙法院門跡堯如法親王に下賜されて妙法院に伝わり、明治13年に妙法院より皇室に献上されて現在に至る。後西天皇に伝わるまでの経緯は不明である。

そうした王羲之の筆跡を伝える最優良品として世界的に評価の高い本作品は、精巧な文字、縦簾紙と呼ばれる料紙など、その技法や素材について、これまでに様々に論じられてきた。そのため、それらの論点の調査をこの修理の機会に詳細に行い、作品の状態を把握して確実な保存措置を図ることとした。

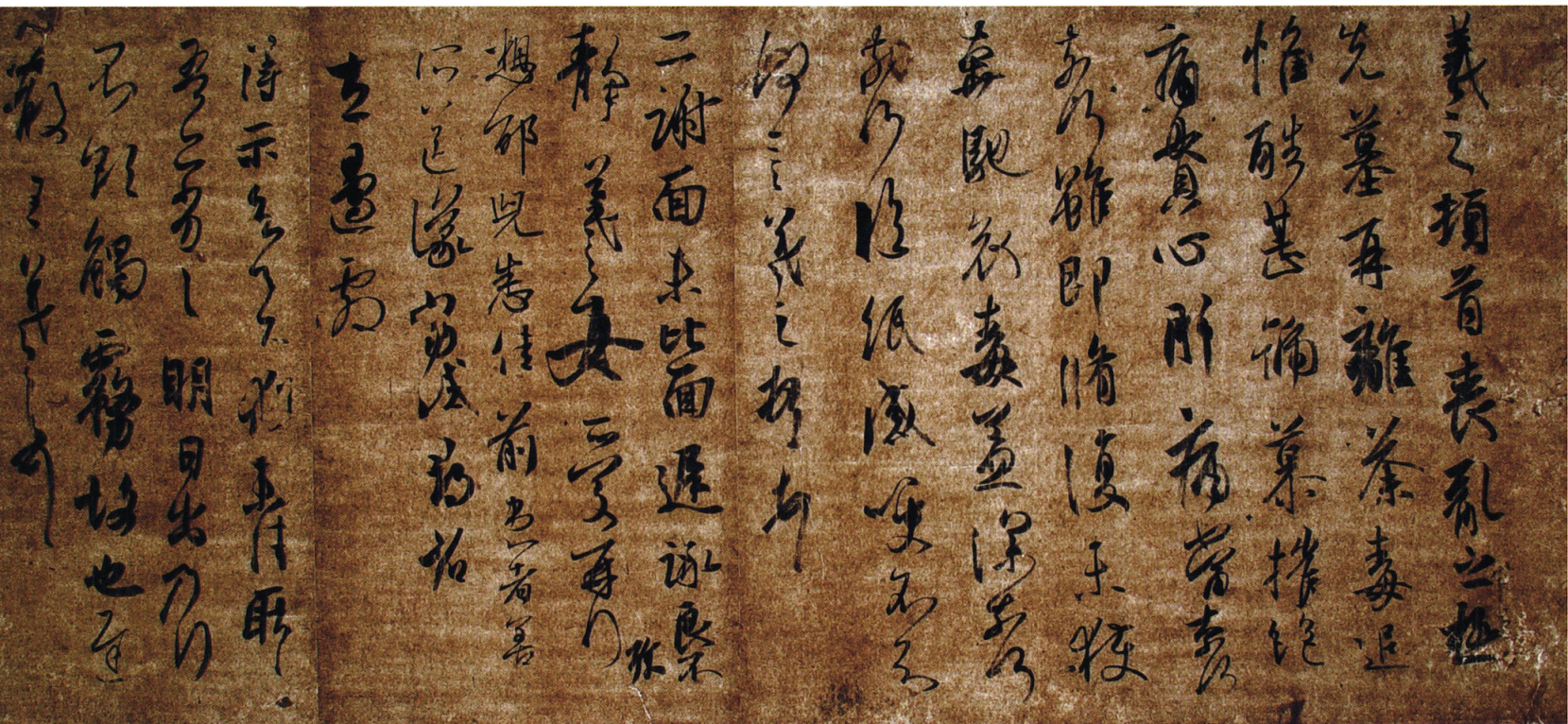
本作品の修理に臨んで、最も注意したのは紙質とその状態である。中国で制作された本紙、それも6～7世紀と古いこと、これまでに幾度も改装や修理の手を経ているために薄くなって脆弱化していることが容易に想像されることから、欠失部に用いる補修紙は本紙の紙質を分析した結果をもとに、同じ紙質のものを制作し、制作後にその紙の状態が安定して後に補修に用いることとした。紙質検査の結果が出るまで、実は、関係者はこの作品の本紙は中国の作品に多く見られる竹紙であると、余り疑いなく考えていた。修理前の目視調査で、紙はかなり薄いとみられたことも、竹紙であろう、と想像させた一因でもある。しかし、検査の結果、雁皮55%と楮45%の混合紙であることが判明し、大きな衝撃を受けたのが事実である。中国の古い時期の紙がどのような状況であるのかが全く判っていない中、少なくとも日本の中世以降に盛んに渡来した中国の品々に含まれる水墨画や墨跡の多くは竹紙が使用されているため、中国の紙、と言えば竹紙、と常識的に考えてしまっていたという誤りもある。しかし、紙の

文化としては日本に先行する中国において、雁皮や楮が原料として使用され、またそれが混合されていた可能性は十分に考えられよう。本作品のこの紙質結果は、今後、中国と日本の紙の歴史を紐解いていく上での重要な資料となろう。

本作品の大きな課題の一つが、縦簾の筋目の入れ方である。これについては、宮内庁ならではの調査として、正倉院宝物の関連作品との比較を実際に行い、さらに本作品を精査して考察した。比較した光明皇后筆「楽毅論」の縦簾の筋目が、明確に紙裏から窺のようなもので押し付けられて出来た線であることを参考に、本作品について調査した結果、表が凸、裏が凹と確認できる箇所が多く認められたことから、やはり窺のようなもので裏面から押し引いてできた線であろうことを確認した。線の幅は、「楽毅論」においても広狭があったのと同様に本作品でもそれが認められ、またさらに「孔侍中帖」（前田育徳会所蔵）でも同様である。これらの特徴の一致は、縦簾の筋目の入れ方として、裏面から窺のようなものを押し当てて引く、ということが一つの通例の方法であったということであろう。

また、文字の書き方についてもその詳細が判明した。今回の調査では、本紙のみの状態で背面より透過光を当てるなどの調査が可能であり、また調査機器の発達により細かな部分の画像をとらえることが出来るため、より確かな結論が導けた。文字は輪郭のような線の中に細い筆を丁寧に何度も運び重ねて、まるで一本の筆を運んだかのように表現されたものである。明確に何かをなぞったと判断できるのが、虫損によって文字が欠失している箇所、他に比べて細く、薄く虫損の輪郭を引いている。文字の跳ねた先や文字と文字の繋ぎ部分では、輪郭線の内側を細い線が丁寧に重ね運ばれている様子が確認できる（45頁下図版）。まるで一文字一文字が、一筆で書かれるような表現となっている精巧な技法が確実に確認できたことも大きな成果であった。

貴重であり、重要な作品を修理することは、その作品の謎を解く手がかりの有無を調査する機会でもあることを承知し、修理という作品の保存措置を実施する中で、作品に影響を与えない範囲でいかに行うか、それを行う責任は実に重い。そうしたことを痛感させられた大きな修理事業であった。



裏打除去後の本紙の状態（透過光）
本紙は過去の修理で相剥ぎされて厚さに斑が生じている



文字の筆線の様子

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

開館20周年記念
美を伝えゆく 一名品にみる20年の歩み—

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成25年10月12日発行

© 2013, The Museum of the Imperial Collections, Japan

The 20th Anniversary Exhibition of the Sannomaru Shozokan
Passing Art works to the Future –The Museum's 20 Years of Research on Masterpieces–

Edited by the Museum of the Imperial Collections, Sannomaru Shozokan

Produced by Tokyo Bijutsu Inc.

Translated by Hiroko Kurokawa

Published by Imperial Household Agency

Issued on October 12, 2013

© 2013, The Museum of the Imperial Collections, Japan